現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第9回

監修／蘇士澍 中国書法家協会主席
取材・文／郭同慶

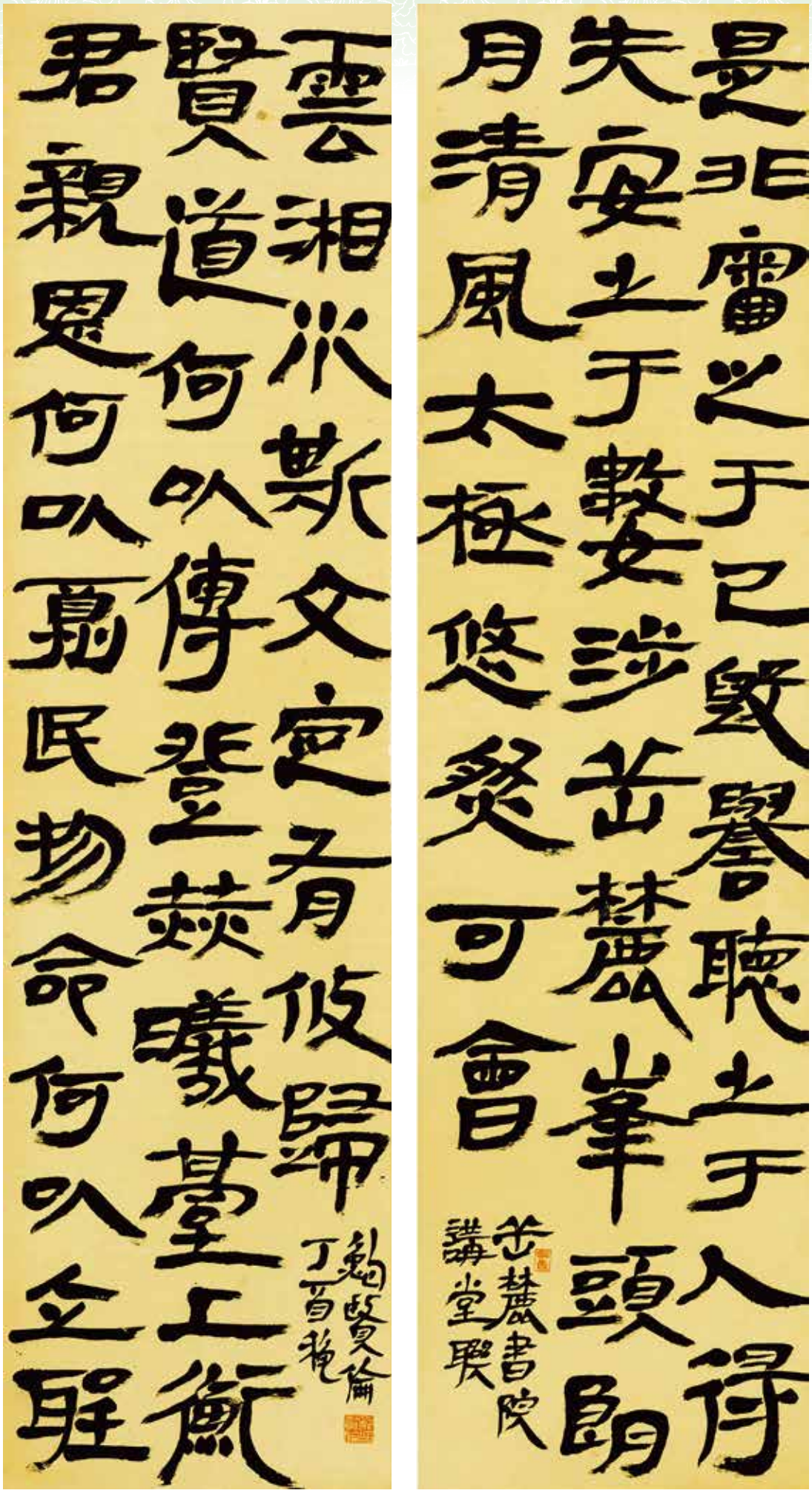
鮑賢倫

ほう・けんりん
一九五五年、上海に生まれる。紹興市書法協会主席、紹興市文化局長、浙江省文物局長、浙江省文化庁副長官などを歴任。二〇一四年に北京・中国美術館、一五年に浙江省美術館、一六年に遼寧省美術大学美術館で個展を開催。一八年末、浙江省紹興市東茗郷に「隷書・陶淵明《帰去来兮辞併序》」の摩崖石刻が完成。現在、浙江省書法家協会主席

浙江省書法家協会主席・鮑賢倫氏は、新出土の「秦簡」を深く研究し、ついに隷書の新スタイルを創出した。「前人未踏」の書風は高く評価され、二〇〇四年には北京の中国美術館で個展を開催。円形大ホールを飾った超大作は、巨大な摩崖石刻として昨年末に完成し、中国国内で大きな話題となっている。（編集部）

中国当代9.indd 94 2019/06/10 22:02

隸書《三十三言聯》（岳麓書院講堂聯）



是非審之於己　毀譽聽之於人　得失安之於數　涉崖麓峰頭　朗月清風　太極悠然可會

君親恩何以酬　民物命何以立　聖賢道何以伝　登赫曦台上　衡雲湘水　斯文定宥攸歸

140×35×2
2017年

中国当代9.indd 95　2019/06/10 22:02

新隷書体で書壇を牽引 鮑賢倫

巨大な摩崖石刻プロジェクト

今年の初めに東京国立博物館（東博）が開催した「顔真卿――王羲之を超えた名筆」展は大成功を収め、記録的な来場者数に達したと聞いた。筆者も三回ほど観覧して感じたのは、顔真卿の《祭姪文稿》もさることながら、唐・玄宗が隷書で封禪（ほうぜん）（儀式）の内容を記した《紀泰山銘》の巨大な摩崖石刻の素晴らしさである。実は三年前に泰山大観峰で拝観したが、派手な金粉を溢れるほど塗った現地の摩崖（まがい）よりも、拓本のほうがずっと好ましい。東博の特別展の会場では、記念写真の撮影が許可された《紀泰山銘》は抜群の人気だった。周興嗣は《千字文》において「策功茂実、勒碑刻銘」（功を策（しる）し実を茂（しげ）くし、碑に勒（ろく）し銘に刻（こく）す）と言う。中華民族は古代より功績や名声を石碑や摩崖に刻んで後世に残すこと好きだったのである。

歴史は繰り返されるとよく言われる。近年の中国では、再び「摩崖石刻」が流行り始めた。背景の一つは、世界第二位の経済大国になった中国における、市町村の豊かな経済力だ。また、市町村は地域活性化の政策として、著名な書家の書を「摩崖」に刻して新たな観光スポットにしようとしている。今年の二月、今回の主人公となる鮑賢倫氏の、《紀泰山銘》よりもさらにスケールが大きい巨大な「摩崖石刻」プロジェクトが堂々と完成し、中国国内で大きな話題となった。

二〇〇四年、北京の中国美術館にて個展が開催され、円形大ホールには隷書の超大作《帰去来兮辞并序》（陶淵明）が展示された

摩崖石刻で地域活性化

現在、浙江省書法家協会主席の鮑賢倫氏は、二〇一四年六月、北京の中国美術館で個展「我襟懐古・鮑賢倫書法展」を開催した。円形ホールの壁に合わせた幅三四メートルの超大作、隷書《帰去来兮辞并序》（陶淵明）は、来場者を魅力した。最も感銘を受けたのは門人の何国門氏である。何氏は書画に堪能であると同時に、文化による地域活性化プロジェクトの仕掛け人である。恩師の傑作に圧倒された何氏は、美術館の展示期間の終了とともにこの作品を見ることができなくなるのは非常に惜しいと思い、永続的に展示され、保存される方法を考えた末、自身の故郷の美しい山肌に原寸サイズで摩崖石刻にする案を思いついた。

鮑賢倫氏の書、隷書《帰去来兮辞并序》（陶淵明）を摩崖石刻にする官民一体のプロジェクトの誕生である（以下、「鮑隷摩崖」と略称）。同プロジェクトチームは、《泰山金剛経》を始め、各地の摩崖石刻を調査した。そして中央政府の農村振興の支援策を調査し、地元との調整も順調に進んだ。茶畑の背後にある石山が選ばれ、摩崖制作、古梅移植、村道の整備などを含んだ総合的なビッグプロジェクトが二〇一八年春に着工。経験豊富な石匠職人と最新技術の力により、一年に満たないうちに、平らに削られた山壁（幅三十五メートル）に、計七百字余りの隷書が刻された巨大な石刻が昨年末に完成した。落成式は、今年の二月十三日に行われた。鮑氏は「自分の作品がこのようなかたちで地域活性化に役立つことは、望外の喜びである」と感嘆した。

浙江省紹興市東茗郷の「石門坑」は、三百七十戸、人口千人未満の無名な村だったが、この巨大な「鮑隷摩崖」の完成に併せて、徐正濂氏が題字した「世外桃源」、石開氏が題字した「霊雨岩」なども一斉に完成。鮑氏の書を中心にした「石門坑摩崖石刻群」の壮観は、インパクトの強いニュースとなって中国全土に伝わり、「石門坑」は一躍有名になった。

一六〇〇年前に陶淵明が提唱した「帰田園居」の理想郷「世外桃源」（桃源郷）――。「石門坑」のプロジェクトは、鮑賢倫氏と門人の何国門氏の二人三脚が核心となり、行政を巻き込んだ「桃源郷」の建設として首

中国当代9.indd 96 2019/06/10 22:02

鮑賢倫氏の隷書摩崖が茶畑と一体になった浙江省紹興市東茗郷の田園風景

尾良く事が運んだ。この建設によって、産業や観光にも大きな波及効果が見え始めた。観光客はもちろん、書画家や写真家の団体・協会が取材ためにバスで訪れるようになっている。村の中には観光業による収入を見込んで、飲食、宿泊などの分野で起業する若い者も増えた。都市部に出稼ぎしていた人々もUターンによって村へ戻り、また村への移住を募集する説明会には中国各地から六〇名ほどの人たちが駆けつけたという。

《紀泰山銘》や《泰山金剛経》のような巨大な摩崖石刻は中国にも数が少なく、建設用の資金確保や戦乱・動乱などの要因により、建設途中で挫折したものも多い。康有為（一八五八―一九二七）が「天下一の榜書（ぼうしょ）（大字）」と評した《泰山金剛経》も、残念ながら未完成である。

その一方で、鮑賢倫氏の隷書《帰去来兮辞併序》は原作の書も素晴らしく、それを刻した「鮑隷摩崖」も魅力に溢れ、「石門坑摩崖石刻群」の中で最も中心的な役割を果たしている。私は「鮑隷摩崖」が今世紀の最大・最強の摩崖石刻として記憶されることを確信している。読者の皆様も機会があれば、ぜひ足を運んでほしい。

二人の師との出会い

一九五五年一月に上海で生まれた鮑賢倫氏は、文革中の一九七二年に高校を卒業した。「下放運動」に巻き込まれた大勢の同期生が農村や山村に強制的に送られた。就職の自由がない文革中に鮑氏は貴州省の軍事工場での仕事を拝命し、赴任前に上海重型機器製作所で三年間の実務研修を受けた。先輩の中には、後輩の面倒をよく見てくれた李福眠氏がいて、李氏はまた書画の愛好家である。鮑氏を弟として可愛がってくれた。休日には知人の書家・画家の家にも連れて行ってくれた。ある日、二人は上海で頭角を現していた韓天衡氏（一九四〇―）を訪ねた。韓氏は教え上手な先輩書家・

中国当代9.indd 97　2019/06/10 22:02

杭州にて書法の師・徐伯清先生と鮑賢倫氏夫妻

貴州大学時代の恩師・姜澄清教授と若き鮑賢倫氏

徐伯清先生（一九二六―二〇一〇）を推薦し、紹介状を書いてくれた。鮑氏は一九七四年に徐伯清先生に入門した。師匠となった徐先生は張大千や呉湖帆の弟子であり、上海の名所・豫園の書画部の責任者で、各種展示会や講習会、そして揮毫会を盛んに主催することで、当時の上海ではかなりの名士であった。豫園は外国人観光客が必ず訪ねる上海観光の人気スポットだったので、日本人を含むファンも多い。徐先生の作品が求められることも多かった。

鮑賢倫氏は、書法人生の中で徐先生から最も影響を受けたと振り返った。中国の格言に「厳師は高徒を出す」（厳しい師の中から優れた弟子が出る）とあるように、徐先生はとにかく厳しい。先生は「数量は質の改善の絶対的な前提だ」と練習量の力を強調した。宿題の数はあまりに多く、それに耐えられないものは自然に淘汰された。同門の兄弟弟子の中には、「地獄訓練法」と呟く者もいた。宿題を完璧に完成できず、提出できない弟子は、「返れ」と本気で追い返した。

鮑氏が毎晩の研鑽に四、五時間を費やすのは、日常茶飯事であった。鮑氏はいつも大きな鞄に宿題を積み込んで行き、すると先生は笑顔で迎えてくれた。最初は隷書の臨書によって文字の構えを学び、次いで草書の臨書によって点画の筆運びを訓練し、そして楷書の臨書に取り組む。各種隷書の「漢碑」を中心に、草書は孫過庭《書譜》、楷書は褚遂良《倪寛讃》《雁塔聖教序》などの臨書が繰り返された。細字の臨書が五〇万字に達した頃になると、先生も興奮気味になって、稽古で来る弟子に「ほら、見てご覧なさい。鮑君の記録を破る者は誰かいるのか」と発破をかけた。

宿題の添削も非常に厳しかった。また、徐先生は流行する卑俗な書体には十分な注意を喚起し、眼福になるような収蔵品の書画鑑賞も行い、また常に董其昌、惲南田などの明清書画を書斎に掛け、数カ月で入れ替えも行い、弟子達が名品に触れ合う機会を提供した。

鮑賢倫氏は一九七五年の「上海市青年書法展」において隷書で初入選を果たし、隷書大家の張森氏の作品と並んだ。

七五年末には三年間の研修も無事終了し、予定の貴州の軍事工場に配属が決まり、上海を離れた。宿題は郵送で徐先生に送り続けた。貴州の工場時代に里帰りを許されたのは、年に二回ほど。毎回お土産よりも宿題をたくさん持参した。

一九七六年に文革がようやく終了。翌七七年十二月に全国統一大学入試が復活。鮑賢倫氏は、受験のために半年間、稽古を休んだ。国立四川大学の国語学部の教授陣が魅力で、鮑氏は四川大学の入学を希望した。倍率が高かったが、同大学の合格ラインを通過。しかし「政審」（文字通り、政治的に審査すること）によって、鮑氏は海外に親戚がいるという理由で不合格となった。鮑氏はこの「不幸」に恵まれて、やむを得ずに地方の貴州大学に入学することになったが、そこで素晴らしい教授・姜澄清先生に出会った。

姜教授は現代美術理論研究の先駆けであり、後に中国美術家協会より特別功労貢献賞を受賞した現代美術の権威である。姜教授は《線論》や《書法は根底的にどのような芸術か》といった論文で、「書法は抽象的な芸術だ」との鮮明な論点を提唱。雑誌《中国書法》の編集者は、「新時代に相応しい重要な課題を提示した論文だ」と評価。それが引き金になり、書法芸術に関する討論が全国規模で繰り広げられた。書家を目指していた鮑氏がその動向を興味津々で注目したことは、想像に難くない。また姜教授の理論や教えを素直に受け入れ、他の書法家とは異なる、書法理論を重視する書家になろうと、心の中で方向性を定めた。

中国当代9.indd 98 2019/06/10 22:03

鮑賢倫氏は、二人の優れた師――上海の徐伯清先生によって書法の技術を学び、姜澄清教授によって書法の学術領域に導かれたのである。

大学卒業の前の年、一九八一年に啓功氏らを審査員とする「全国第一回大学生書法コンクール」が開催され、鮑賢倫氏と同級生の包俊宜氏（現在、中国書法家協会副主席）は一等賞を受賞。一大学で二名の者が一等賞を受賞したのは、貴州大学以外には北京大学だけだった。鮑賢倫氏にとってこの受賞が書道人生に向かう決定材料となった。良いチャンスにたくさん恵まれた。一九八二年、第一回全国中青年書法展に特別招待された。また日本やシンガポールとの二カ国交流展でも、限られた数十名の中に選ばれた。

卒業時、成績が良く、学生会長でもあった鮑賢倫氏は、貴州省文化庁の下部組織である貴州書画院への配属を希望した。しかし、文化庁の研修を経た後に決まった配属先は、希望とは異なっていた。映画学院の講師に任命されたのである。人事担当に理由を尋ねたところ、書画院は定員のためだという。一九八三年、同大学の後輩と結婚し、新婦が浙江省紹興市に就職した縁で、鮑氏も紹興市立師範大学に転職し、国語の講師になった。一九八六年に国語学部の副部長、一九八八年に部長を経験し、同大学は鮑氏とって鍛錬と成長のステージであった。

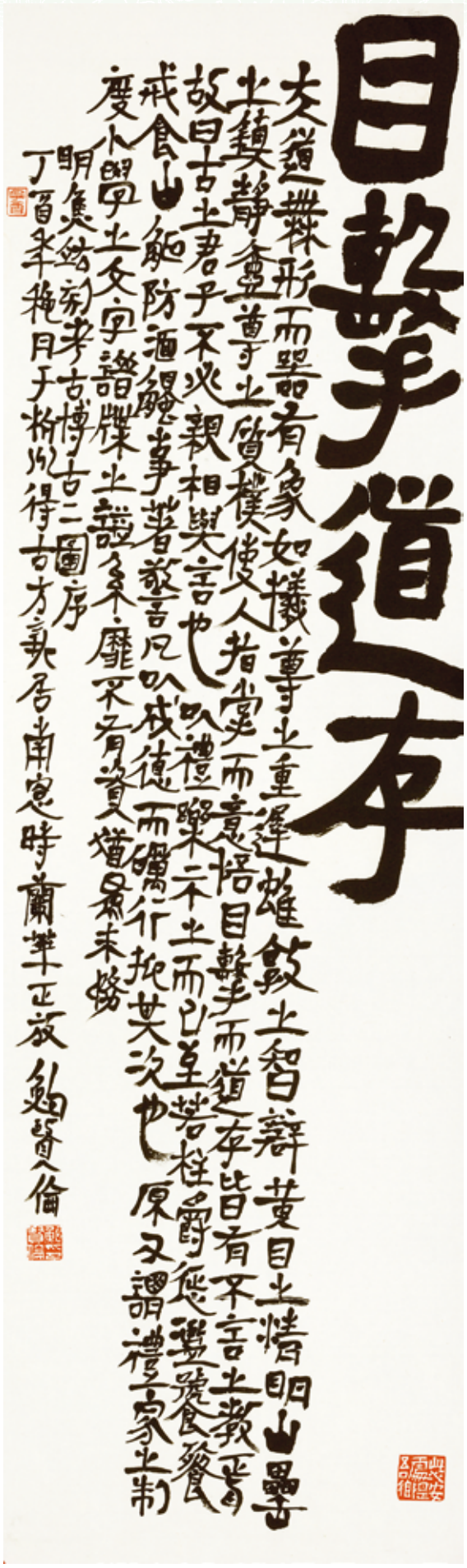
鮑賢倫氏は師範大学に書法研究室を設立し、学生たちが「三筆」（ペン、チョーク、毛筆）を確実に上達できるよう教育体制を整えた。一九八四年十月、設立に貢献した紹興市書法家協会の副主席に就任。そして一九八九年には、紹興市書法協会主席、兼市文化芸術界連合会副主席に就任した。

文化行政と書協で大活躍

鮑賢倫氏は一九九一年、紹興市文化局長、文化局共産党委員会書記に任命された。在任の五年間、毎年、旧暦三月三日「上巳節（じょうしせつ）」の日には、健康と厄除を願い、そして王羲之が主催した「曲水の宴」を記念して、「蘭亭書法節」（フェスティバル）を主催する立場になった。一度だけ、二〇〇一年に北京の中央党校で缶詰の研修があり欠席したが、ほかは毎年、参加者であり、かつ運営の責任者であった。

鮑氏はその実力を認められ、一九九六年に浙江省文物局長、一九九九年に浙江省書法家協会副主席、二〇〇〇年に浙江省文化庁副長官となり、文字通り、順風満帆だった。

そして二〇一〇年、第六回浙江省書法家協会代表大会にて、朱関田氏（一九四四―）の後任として省の書協主席に就任した。鮑氏は尊敬する省書協の元主席であった沙孟海氏、郭仲選氏らを手本とし、大胆な「継承・解放・創造」の運営方針を打ち出した。「継承」とは、浙江省内で王羲之、虞世南、褚遂良、徐渭、呉昌碩など、偉大な書家を輩出した悠久なる書法の歴史を継承する

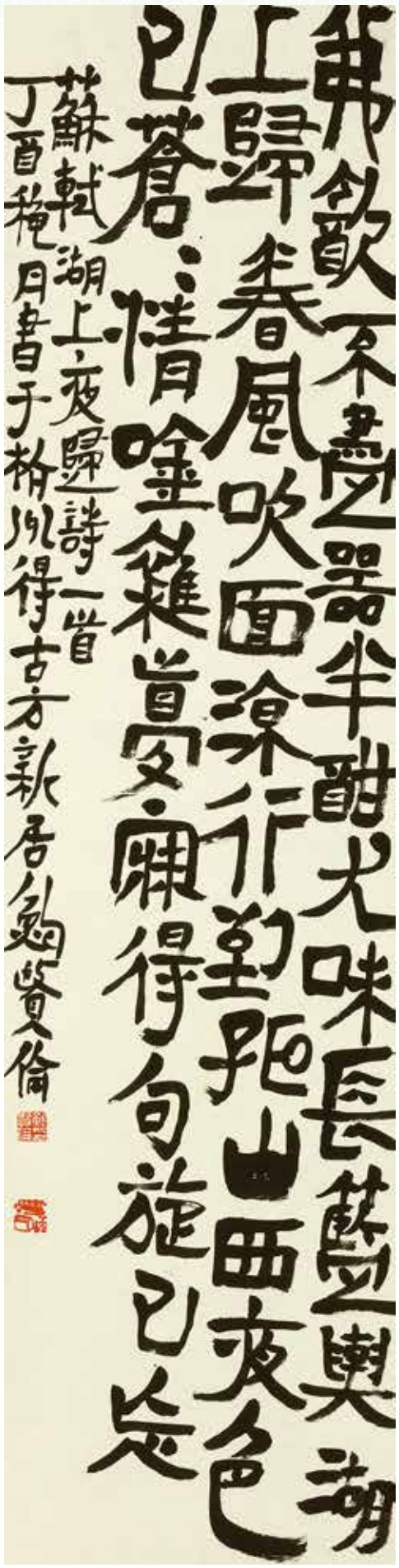


隷書《目撃道存》

119×35　2017年

中国当代9.indd　99　2019/06/10　22:03

隷書《湖上夜帰》（蘇東坡）



我飲不尽器　半酣尤味長　籃輿湖上帰　春風吹面涼　行到孤山西　夜色已蒼蒼　清吟雑夢寐　得句旋已忘

138×34　2017年

こと。「解放」とは、浙江省をより解放し、国内に限らず、海外の書法団体や個人との交流を推進すること。そして、誰でも自由に研究や創作が出来る環境を整備すること。「創造」とは、未熟な挑戦や探求の失敗などを温かく見守る風潮を作り、互いに助け合い、前人未到の境地を探求する挑戦者を激励すること。

そのような方針のもと、鮑氏は中国書法家協会と紹興市政府の会談をセットした。そして省宣伝部や紹興市政府が共同主催者となり、中国書法最高賞・蘭亭賞を永久に紹興市に定着した。省書協は実行団体として参加。実行予算は市が支出。毎回数百万元の経費が保証された。

「蘭亭書法賞」のことは、この連載の前回でも触れた。中書協（中国書法家協会）が三年おきに行う「中国書法最高賞・蘭亭書法賞」は、運営資金の関係で開催地が流動的、不安定であった。中書協は、実力のある自治体と長期間の提携をして開催地を定着させたいと希望していた。そのとき、書法の聖地・蘭亭を持つ紹興市がその使命感や責任感によって、中書協が主催する「蘭亭書法賞」の表彰式典を「蘭亭書法節」に誘致したのである。この計画が滞りなくまとまることになったのは、当時、省の文化行政に携わりながら書協の責任者でもあった鮑賢倫氏が果たした役割が大きかった。

現在の「蘭亭書法節」は、三部構成である。中国文聯（中華全国文学芸術界聯合会）と中書協が共同主催する「蘭亭書法賞表彰式典」は、三年に一度。省書協主催する「蘭亭雅集」は、二年に一度。地元紹興市が主催する「蘭亭書法節」は、毎年。紹興市や浙江省の重要なポストを歴任してきた鮑賢倫氏の功績によって、聖地・蘭亭に相応しい内容や規模にまで「蘭亭書法節」は成長したのである。二〇〇一年に創設された「中国書法最高賞・蘭亭書法賞」は、二〇一二年の第四回以降、二〇一五年の第五回、二〇一八年の第六回と、すべて紹興市で盛大かつ厳粛に開催された。

十七年にわたって省の文物行政に携わり、陣頭指揮を発揮し続けた鮑氏の顕著な功績は、それだけにとどまらない。六年間をかけて日本や欧米を含む百以上の博物館や収蔵機関の協力を得て、世界で最も権威のある大型図書《宋画全集》や《元画全集》を編纂し、出版した。また、蘇東坡らの詩文によって夙（つと）に有名な「西湖」を世界遺産に登録させた。

二〇一五年九月、第七回浙江省書法家協会代表大会で鮑賢倫氏の主席の続投が決まり、現在に至っている。

「秦簡」で独自の書風を確立

中国では《乙瑛碑》《曹全碑》などを「漢碑」といい、居延（きょえん）や武威（ぶい）で発掘された木簡・竹簡は「漢簡」という。前者は拓本で、後者は肉筆である。鮑賢倫氏は若い頃「漢碑」風の隷書が得意で、一九七五年の上海市青年書法展では隷書で入選した。しかし、その後の鮑賢倫氏は、次々と出土する「漢簡」「秦簡」に関心を移していった。

中国当代9.indd　100　2019/06/10　22:03

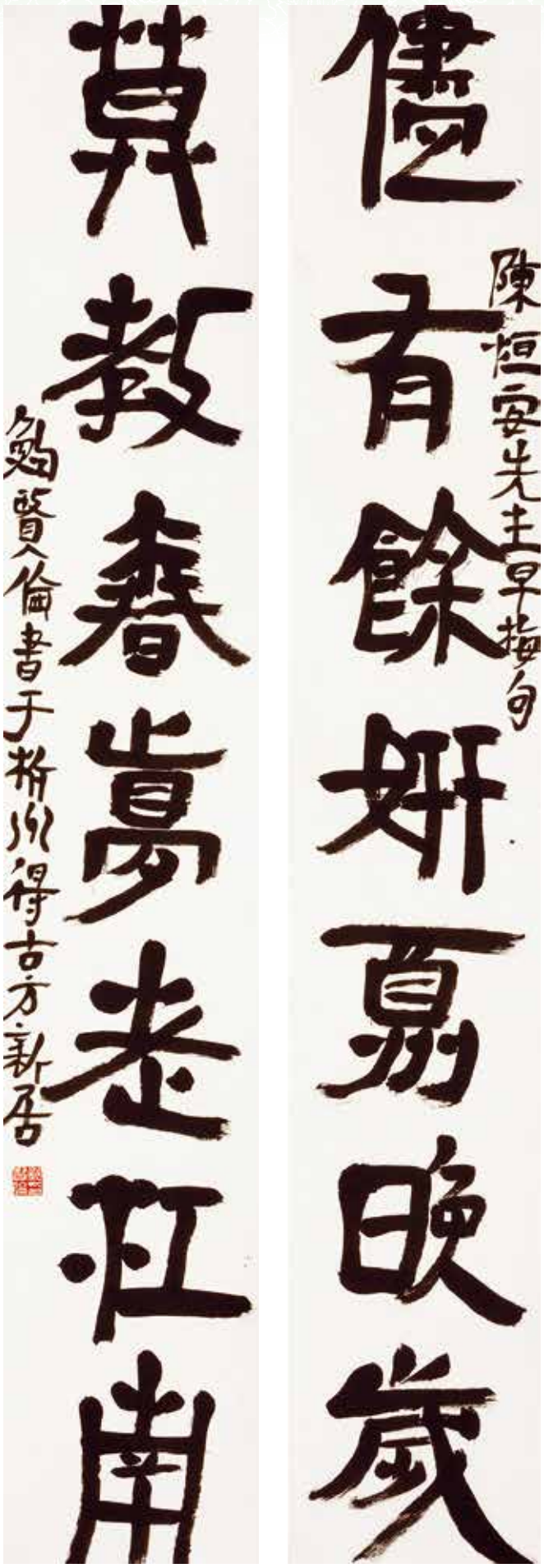
特に「秦簡」に深く注目した。一九七五年に湖北省雲夢県睡虎地で戦国末期の秦国一一号墓より一一五五枚、一九七九年に四川省青川県郝家坪で秦国五〇号墓より二枚（「秦牘」）、一九八六年に甘粛省天水県放馬灘で秦国一号墓より四六一枚、一九八九年に湖北省竜岡県で秦国六号墓より三〇三枚、一九九一年に湖北省江陵県揚家山で秦国一三五号墓より七五枚、一九九三年に湖北省江陵県王家台で秦国一五号墓より八八〇枚余り、一九九三年に湖北省荊門県周家台で三〇号秦国墓より三八九枚、二〇〇二年に湖南省竜山県里耶鎮で三万八〇〇〇枚余り、――この「里耶秦簡」の出土が最も世界を驚かせた。

これらの新出土の資料によって、秦の程邈が獄中の歳月に耐えながら考案した三千字の隷書草案が始皇帝に献じたという、従来の隷書誕生説が覆された。戦国時代の秦国で使用されていた「秦簡」は、未完成の雛形ではなくかなり成熟した隷書といえよう。

鮑賢倫氏にとっては、贅沢な研究資料ばかりだった。これらに対して、「最大のエネルギーを注いて打ち込み、また、最大の勇気をもって脱出しよう！」（李可染の言葉）を座右の銘として取り組んだ。若い頃に徐伯清先生に鍛えられた忍耐力で「秦簡」に深く取り組み、ついに咀嚼した。扁平型の字形や波磔の特徴は消えた。鮑賢倫氏によって隷書のイメージは大幅に刷新されのである。

文革後の上海書壇で活躍した来楚生氏や銭君匋氏らの先輩の大家は、すでに「漢碑」と「漢簡」の融和を成功させ、優れた門人を何人も生み出し、追随者が大勢いた。鮑賢倫氏も影響を受けた。しかし八〇年代以降の隷書書風の流行について、このままでよいのか鮑氏は長く悩んだ。そのとき鮑氏は「秦簡」に奇跡的に出会ったのである。「秦簡」に取り組む書家は、全国的にまだいなかった。広東省中山大学の商承祚教授（一九〇二―一九九一）は、古文字学者の観点によって「秦簡」風の書を時に書いた。しかし年配の学者の字は厳粛で、恭しい書風であり、流動的な要素や活発的な筆遣いはあまり見られなかった。

当初、「秦簡」風で書いた鮑氏の作品は不評で、否定的な意見ばかりの一辺倒だった。だが、鮑氏は曲げなかった。黙々と「秦簡」を研鑽し、試行錯誤の繰り返し、十年の日々を費やした。理解を求める努力もした。「私が隷書を書く」と題にした論文に作品を添えて雑誌に



隷書対聯《陳恒安早梅句》

138×23×2

中国当代9.indd 101　2019/06/10 22:03

鮑賢倫氏の創作風景

発表したが、効果はほとんどなかった。

二〇〇六年元旦、転機が到来した。鮑氏は最も好きな「放馬灘秦簡」を中心に、出土した秦漢の簡牘帛書の神髄を咀嚼し、成果となる新作を杭州・恒蘆美術館で発表した。展覧会のタイトルは「夢想秦漢」（秦漢を夢想）。旗印は鮮明であり、作品に押した「夢見秦漢」（夢で秦漢を見る）、「秦漢人笑我」（秦漢人は我を笑う）は、鮑氏の秦漢に対する憧憬の表れであった。

完成度の高い新スタイルの隷書の発表によって世論は急に絶賛に転じ、また否定的意見を持っていた畏友たちも、その「前人未踏」の書風を高く評価することになった。この個展によって、鮑氏は正しく「一鳴驚人」（一鳴して人を驚かす）だった。

二〇〇八年一月は海寧市徐邦達芸術館、同年九月は寧波市美術館で、二年の間の新作六〇点を発表した。この時になるとついに中書協も動き、中書協学術委員会や隷書専門委員会が寧波金港飯店でシンポジウムを開催。陳洪武氏が進行役となり、三十数名の書法大家、評論家、芸大美大の教授などが発言し、それぞれが鮑氏の作品から受けた衝撃と震撼を語った。そして同年、鮑氏は栄冠の「書法界十大ニュース人物」や「年度人物十人」の一人に選ばれた。

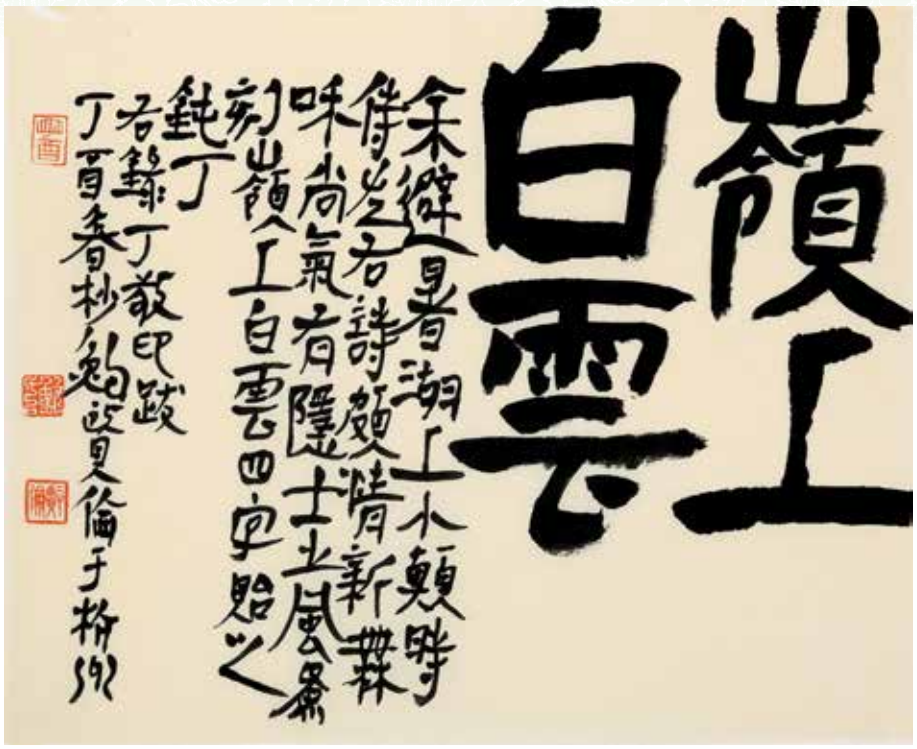
二〇一四年六月には、中央へ進出。中書協や中国美術館、中共浙江省宣伝部、浙江省文化庁、および浙江省文聯五団体が共同主催した「我襟懐古」（我襟古を懐かしむ）というタイトルの個展を中国美術館で行った。「志於道」「敬於事」「遊於藝」の三つのブロックに分かれた展示によって、鮑氏は、自身の書芸に対する理想や信念、書法に対する探求とその成果を披瀝した。メインの円形大ホールは、一点の超大作で埋め尽くされた。冒頭でも紹介した幅三四メートルの傑作、後に浙江省「石門坑摩崖石刻群」の中心となる「鮑隷摩崖」

中国当代9.indd 102 2019/06/10 22:03

の原作、隷書《帰去来兮辞并序》である。中国美術館の范迪安館長は、搬入日にその超大作を目にして感動し、自ら開幕式で挨拶のスピーチをしたいと、参加するだけだったはずの予定を変更したほどだった。

鮑賢倫氏にとって、二〇一四年は異例ともいうべき良き運勢の年だった。

鮑氏は中国美術館での個展の開催一カ月前に、「AAC中国芸術賞」の年度人物に選ばれた。同賞は、新メディア・雅昌が出資し、十一名の著名な芸術家、芸術評論家、大学教授、美術館館長で構成する審査委員会がその年度で最も影響力のあるアーティストを選出するもの。鮑氏は、書法芸術部門で唯一の受賞者となった。他の二名の有力候補、孫伯翔氏（一九三四―、連載第四回）と何応輝氏（一九四六―、当時、中書協副主席）を押さえて当選したのである。受賞式は、故宮博物院で盛大に行われた。新旧のメディア各局が中継し、この受賞によって、鮑氏は国民的な書家となった。ちなみに前年度の受賞者は、狂草の大家・王冬齢氏（一九四五―、連載第六回）であった。



隷書《嶺上白雲》（丁敬印跋）

31.5×39　2017年

二〇一五年に浙江省美術館、一六年に遼寧省美術大学美術館と招待個展が続いた。二〇一六年には、上海市書協が各地で活躍している上海出身の書法家（香港・台湾・マカオ地区を含む）として、鮑賢倫氏、傅申氏（一九三七―）、曹宝麟氏（一九四六―）、徐本一氏（一九四六―）などを招待し、上海で交流展覧会を行った。

戦後の上海書壇には、鮑氏の師・徐伯清先生のほかにも沈尹默、胡問遂、任政といった大家がいたが、全国で評価される書法家は少なかった。そこで上海籍で全国的な成功を収めた書家から進言を聞くために、シンポジウムも開催された。上海書協の某副主席は、「あなたたちは羨ましい。もし上海を離れなかったら、今の独自な書風は創出できなかっただろう」と感嘆を極めた。傅氏は「戦前・戦後の上海書壇（史）」、曹氏は「古典の考証」、そして鮑氏も「入古と創新」をテーマに講演し、成功の秘訣を語り、プライドが高い大都市・上海の書家たちに一石を投じた。近年、上海書壇の中堅書法家たちが鮑賢倫氏らの成功例を鏡にして、オリジナリティの探求を強化し始めた。

書法史に刻まれる新隷書体

一九八七年、鮑賢倫氏は紹興市立師範大学の講師だった。その春、市内の名所・蘭亭で初めて開催された「曲水の宴」には、二十数名の日本人の書の大家が参列した。若き講師であった鮑氏の目に映った日本人の書家の姿は、素晴らしいものだった。着物を着た青山杉雨先生や村上三島先生らには、オーラが溢れているように見えた。傍観席にいった鮑氏は歯を噛み締め、頑張ろうと決心したそうだ。その後、紹興市や浙江省で教職、書協、文物局や文化庁などの任期中、さまざまな日本の書道団体や個人と触れ合った。

結びに、鮑賢倫氏が創出したオリジナリティ溢れる「秦簡」風の隷書は、中国で大きな影響を広げている現状を報告しておきたい。と同時に、鮑賢倫氏の「秦隷」が金農の「漆書」、鄭板橋の「六分半書」と並んで書法史に深く刻まれることを、ここに確信をもって明記しておきたい。

郭同慶 かく・どうけい
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、方世聰、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名誉院長、東京海派書画院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生顕彰会会長、豊道春海顕彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる

中国当代9.indd　103　2019/06/10　22:03